

カトリック山手教会月報

やまて



編集・発行 カトリック山手教会 広報委員会 〒231-8652 横浜市中区山手町44番地
☎ (045) 641-0735 <http://catholicyamate.org/>

第667号 2025年9月14日

聖母被昇天ミサ

8月15日（木）10時30分から、聖母の被昇天ミサがミカエル鈴木真主任司祭主司式、教区副事務局長・アシジのフランシスコ牧山善彦師との共同司式で執り行われました。

ウィークデーにもかかわらず多くの信徒が参加し、共同祈願では①被昇天の恵みにあずかったマリアの信仰にならい、わたしたちが苦しむ人、悲しむ人とのきずなのうちに天の国を目指すことができますように②聖母マリアは、母として御子の苦難とともに耐え、救いの“みわざ”をともに担われました。わたしたちが日頃の信仰生活で、このことを常に思い起こし、聖母にならい、平和を実現することができますように一と唱えました。

最後に「平和を願う祈り～アシジの聖フランシスコの祈りより～」を全員で心を合わせて唱えました。

鈴木 真師の説教

ルカ福音書 第1章39～56節

「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。」…マリアの賛歌、通称「マニフィカト」と呼ばれる箇所です。「マニフィカト」とは、ラテン語で「あがめる」という意味で、ラテン語訳の聖書のこの箇所がその言葉から始まることから、こう呼ばれるようになりました。多くの音楽家が、この箇所を楽曲にしています。

「今から後、いつの世の人もわたしを幸いな者と

言うでしょう。」この箇所に触れるたびに、すごい言葉だなあとと思います。どのような時代であっても、人々はマリアを「幸いな者」と呼ぶ、というのですから。ただし、この「幸い」とは、わたしたちが単純に考える「幸せ・幸福」とは違います。マリアの生涯を思い起こす時、それは明らかでしょう。この「幸い」とは神さまの目から見た「幸い」、そして、それは神さまからの「祝福」とも関係するもの、と言われます。神の祝福とは「神さまの喜び」。つまり、その人の存在そのものが、神さまにとっての「喜び」であることを意味します。

マリアが「幸いな者」と言われるその理由が、次の行で表されます。

「力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。」要するに、マリアに神さまのわざが臨んだことが「幸い」だ、というわけです。

そして、ここでふと思います。わたしたちにも、マリアに臨んだ同じ聖霊の力が注がれている。わたしたちにも、いつも神さまのわざが臨んでいる、と。つまり、マリアの「幸い」に触れる時、わたしたちにも、臨んでいる神さまのわざに気づく、しかも、それが神さまの「喜び」であることを悟る、ということでしょう。そして、それはマリアにとってもそうだったように、わたしたちにとっても必ずしも都合のいいことであるとは限りません。時には、痛み、苦しみを伴うものでもあるでしょう。

しかし、その「わざ」を通して、神さまは多くの人を救いへと導いていてくださいます。だからこそ、マ

リアはそのすべてを受け止めました。教会が聖母マリアに特別な尊敬を持つ理由は、ここに 있습니다。

聖母の祝日に、その取り次ぎを願いつつ、わたしたちもまたマリアのように、神さまのわざをすべて受け止めることができますよう、共に祈りたいと思います。



感謝の祭儀

(編集部 土方芳人)

横浜教区神奈川第3地区 共同宣教司牧委員会の報告

7月27日(日)午後3時半から、戸部教会で2025年度第3回横浜教区神奈川第3地区共同宣教司牧委員会が開催されました。

まず3部門の報告が行われ、「信仰を伝える力を育てる部門」から、今年は通常聖年であるため巡礼地である山手教会を巡礼することが話し合われたとの報告がありました。近場の教会から徒歩で巡礼するなどの企画が考えられていて、第3地区の各教会のミサ後に説明をしたいとお話がありました。「祈る力を育てる部門」からは、「自分のことばで祈る」「赦せない人を赦す祈り」など、祈りについて話し合われたとの報告がありました。「神の愛を証

しする力を育てる部門」からは、9月27日(土)から28日(日)に軽井沢で行われる教区懇談会に向けた話し合いがなされ、参加者は会のメンバーから信徒2人と修道者1人を決めたとの報告がありました。

続いて、青少年デスクから夏企画の現時点での準備状況の報告がありました。教会学校リーダー会からは、特に報告事項はありませんでした。

教区委員会関係の報告ですが①ENCOMからは、ベトナム人コミュニティーが県ごとに山手教会に巡礼することなど②ステラマリスからは、8月に横浜雙葉学園の生徒12人を訪船活動に連れて行くことなど③典礼委員会からは、9月8日(月)から10日(水)に全国典礼担当者会議が軽井沢で行われること、10月19日(日)と11月16日(日)に「聖体授与の臨時の奉仕者」研修会が大船教会で行われることなど④信仰教育委員会からは、10月4日(土)に末吉町教会で教会学校研修会が行われることなど⑤一粒会からは、10月13日(祝・月)に箱根の函嶺白百合学園で一粒会大会が行われることなど⑥信仰司牧評議会からは、教区懇談会の説明と、その時に地区分担金を持参することの依頼一、そして、最後に青少年委員会、サポートチーム神奈川、地区連は担当司祭である鈴木師がまとめて報告をされ、特にサポートチーム神奈川では、6月14日(土)に中原教会で3者交流会が行われたこと、11月15日(土)に沼津教会で3者交流会が行われるとの報告がありました。

次回は10月12日(日)午後3時から磯子教会で行われます。

(教会委員会 委員長 小倉 謙)

鈴木 真主任司祭 主日ミサ説教

2025年5月25日 復活節第6主日 C年
ヨハネ福音書 14章23～29節

「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。」

『聖書と典礼』の注書きにもあるように、ミサの「平和のあいさつ」で唱えられるところです。「平和」と訳されたヘブライ語のシャロームという言葉は、

もともと“一つも欠けたところのない状態”という意味で、いわゆる日本語の「平和」とは違います。旧約聖書では、これは「神のみが実現しうるもの」として「神のシャローム」と言われ、イスラエルでは、いつしか、それが挨拶言葉になりました。今でもイスラエルという国では、この「シャローム」があらゆる挨拶の言葉として使われています。

「あなたに神のシャローム（平和）がありますように」、さまざまな民族、そして、文化における挨拶の言葉は、どれも味わい深いものですが、挨拶が「祈り」であるのは珍しい、と思います。それだけに、そのような挨拶言葉を継承している国が、いまだに戦争を続けているのは悲しいことです。

カトリックでそれを継承しているのが、ミサでの「平和のあいさつ」です。わたしたちは半ば慣れてしまって、「主の平和、主の平和」と周りの人に頭を下げるという、おごなりなものになってしまっています。それが相手に対する「祈り」であることを、改めて思い起こしたい、と思います。

きょうの箇所でもうかがえるように、ヨハネ福音書では、この「平和（シャローム）」はイエスが与えてくださるもの（と言うか、神さまからイエスを通して与えられるもの…と言うべきでしょうか）と位置付けますが、そこから「平和のあいさつ」では「主の平和」と言うわけですね。

これも『聖書と典礼』の注書きにあります。復活されたイエスは弟子たちに必ず「あなたがたに平和があるように」と言われます。これは単なる挨拶を超えた、深い呼びかけでもあるのでしょうか。

いつもそう呼びかけてくださるイエスに従って、わたしたちも「神のシャローム」が実現されるための道具として働くことができるよう、共に祈りたいと思います。



(撮影：編集部 土方芳人)

寿町夏祭りカレー炊き出し

今年も8月10日(日)の寿町夏祭りの初日にカレーの炊き出しを行いました。今回も20人以上の信徒の皆様ボランティアと28人の横浜雙葉学園の生徒の皆さんに加えて、カトリック戸塚教会の3人とカトリック金沢教会の3人の方々にも参加いただきました。当日は、あいにくの雨模様で、最初は予定より遅れての作業開始となりましたが、前日の準備、当日の野菜切りやご飯炊き、現地での調理と配食に至るまで、多くの方の自発的な活動によって、滞りなく終えることができました。

また、お米(無洗米)やカレールーのご寄付もお願いさせていただきましたが、68kgのお米と12kgのカレールーをお寄せいただきました。未使用のカレールーやお米は、プロテスタントの「横浜上野町教会フードバンク」や「ほっとスペース関内」に寄付させていただきました。多くの皆様のお心とお手伝いによって今年も500人近い寿町の方々へ温かい気持ちをお届けできたことを本当に感謝しています。

寿町は山手教会の近くにあるところですが、日常生活の中では、なかなか接することがない場所かもしれません。今回の炊き出しを通じて多くの皆様に寿町のことを感じていただき、接していただけることができたことは、私ども福祉委員会にとっても大きな喜びです。これからも私たちの身近な場所で人知れず苦しんでいる方や困っている方の姿を紹介し、接していただける機会を提供できればと考えています。

本当にありがとうございました。



まごころを込めて



準備が整いました

(福祉委員会 委員長 大森秀樹)

ボーイスカウト第34団 夏季キャンプを終えて

今年のビーバー隊の夏季キャンプは、神奈川県相模原市にある桐花園キャンプ場で、8月9日（土）から11日（月）までの2泊3日で実施しました。

今回はカブ隊との合同キャンプの形式だったため、スカウト、保護者、指導者合計37人の大所帯での開催となりました。

1日目はカレーライス作り、川遊び、スモア体験、2日目は陣馬山登山、キャンプファイヤーなどの活動を行い、スカウトたちは初めてのキャンプで、さまざまな体験をすることができました。3日間、雨予報だった中、実際に降ることはほぼなく（2日目の午前に小雨、夜に雨）なんとか天候が保ったのは非常に幸運でした。

私個人といたしましても4月から隊長の役目を拝命し、不慣れな隊運営の中で特段問題なくキャンプを終了することができたことに、安堵しております。

スカウトが楽しい時間を過ごせるよう、今後の活動にも精進してまいりたいと思います。



ビーバー隊、カブ隊合同キャンプファイヤー

（ビーバー隊 隊長 山門 凜太郎）

今年の夏キャンプは、桐花園キャンプ場（相模原市・藤野）で、8月9日（土）から8月11日（月）の2泊3日で行いました。ビーバー隊、カブ隊合同で実施したため、スカウト、リーダー、保護者など、総勢37人が参加し、大変賑やかなキャンプとなりました。

カレーライス作り、スモア、陣馬山ハイク、マスのつかみ取り&BBQ、キャンプファイヤー、川遊びと盛りだくさんのプログラムを子どもも、大人も大

いに楽しむことができました。残念ながら3日間とも曇り、小雨の天候で、多少のプログラム調整などを余儀なくされましたが、昨今の酷暑を考えると、熱中症の心配や大きなケガなどもなく終えることができて、かえってよかったように思います。



陣馬山山頂で

（カブ隊 隊長 山門純也）

私たちボーイスカウト横浜34団ボーイ隊は、コロナ禍後、久々に山中湖での夏キャンプを行いました。標高1000mの山中湖は都会と違って非常に涼しく、スカウトたちも思う存分に自然の恵みの野外活動を楽しみました。

今年からボーイ隊に上がってきた小学6年生の5人は本格的キャンプに戸惑いもありましたが、初めての体験を重ねることによって大いに成長できたことと思います。自然の中で遊んだり、料理と食事をしたり、キャンプファイヤーで歌とゲームを楽しみ、星空を見上げ眺めるなどの反面、雨にも降られながら10Kmを超えて歩いたハイキングなどの試練もありましたが、そのような経験がスカウトたちの将来の糧となってくれば幸いです。



立ちかまどを囲んでのひととき

（ボーイ隊 隊長 武田信一）

ベンチャー隊（高校生）は表丹沢への登山チャレンジのため、秦野市野外活動センターで8月9日（土）から12日（火）の予定で今年の夏キャンプを実施しました。

今回のキャンプは、今後の移動キャンプへの訓練と位置付け、①各人がソロ・キャンプとして参加②日中は必ず移動（山登り）を行う一の2点を経験できるように計画していたのですが、雨にたたられた結果、予定を1日早く切り上げて撤収することとなりました。雨が降らなかったのは初日夕方まで、それ以降は強弱はあるもののずっと降り続け、時に警報級の大雨をテントで就寝中、また塔ノ岳アタック中にも経験しました。予定を1日残しての撤収は無念の決断でしたが、スカウトにとっては得難い経験となりました。



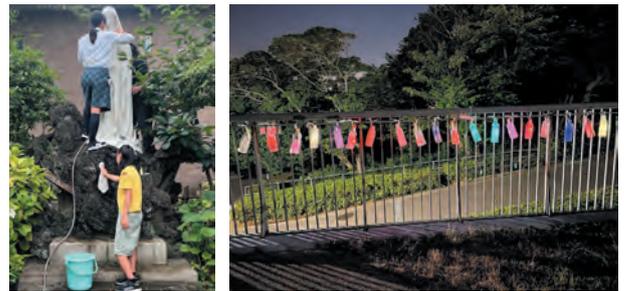
雨の中、塔ノ岳へ向かう途中、二ノ塔手前

（ベンチャー隊 隊長 上田真介）

ブワークも体験しました。

- ③ 毎年参加している「本牧ライトアッププロジェクト」に今年も参加しました。スカウトと教会学校の子どもたちが絵を描いた紙とボタン電池と小さな電球をペットボトルの中に入れて、本牧山頂公園のレストハウスに飾りました。

スカウトが増えますようにと心の中で願いながら…。今年も猛暑の夏でした。



上：横浜ヨット協会の体験クルージング
左：マリア像をきれいに 右：本牧ライトアップに参加

（JCCS横浜教区支部ガールスカウト神奈川85団

団委員長 梅田啓子）

ガールスカウト夏の思い出

山手教会ガールスカウトです。現在、中学2年生のスカウト2人で、元気に頑張っています。教会の中で、白いブラウスまたは紺のTシャツにタータンチェックのスカートの女の子を見かけたら、よろしくお願いたします。

今年の夏も「キャンプ」ができませんでした。いくつかの思い出作りができました。

- ① 教会庭の「マリア像」をお水で洗って、拭きあげてきれいにしました。
- ② 横浜ヨット協会の「体験クルージング」に今年も乗船させていただき、1時間ほどのクルージングの中で、かじ取りの体験と、船上でのロー

ロザリオ会便り

9月21日（日）午後2時より聖堂において、ロザリオ会主催、ヨゼフ会、福祉委員会共催の講演会が行われます。入場無料です。

「人生に寄り添う音楽—ホスピス緩和ケアの現場から—」というテーマで、山手教会オルガニストであり、音楽療法士としても活躍されている米沢陽子さんがお話しされます。そして、講演の後、フルートの下里和子さんと共にコンサートが行われます。

米沢さんは25年以上、聖ヨハネホスピス緩和ケア

領域において音楽療法に携わってこられました。この病院の前院長の山崎章郎さんは、『病院で死ぬということ』という本を著され、それは市川準監督、岸部一徳主演で映画化され、高い評価を得ました。この病院での経験に裏打ちされた米沢さんのお話は、音楽と人生、生と死という深淵しんえんに触れる内容となるでしょう。また人気の高いエンニオ・モリコーネの『ガブリエルのオーボエ』も演奏されます。たくさんの方にいらしていただけるようにと願っています。

ミサ後ですからロザリオ会によるワンコイン・ランチの提供もあります。日曜の午後、すばらしいひとときをお過ごしいただけますように！

(ロザリオ会 広報担当 山本 紀志子)

オルガン昔語り Soli Deo Gloria (I)

今年6月にオルガン設置30周年を記念して開催されたコンサートは、今日に至るまでのさまざまな感謝と感慨を覚える催しでした。かつて完成から十年程経った頃、オルガニストでもあった尾作雪子姉が「今では、すっかりなじまれているオルガンを見ると、(導入を) あれほど反対していた人たちの動きは何だったのかと思うわね」と述懐していたことを思い出します。

今日、日本国内には大小あわせて千数百台のパイプオルガンが存在すると言われていています。教会の典礼用楽器としてヨーロッパで発達したオルガンが、非キリスト教国の日本で、しかも1960年代から、わずか半世紀にも満たない間に急速に普及したことは、世界史的に見ても特筆すべき現象でした。その背景には、経済の高度成長がもたらした国民生活の豊かさや、西洋音楽なかでもバロック音楽が広く受け入れられたこと、さらには1980年代後半に起きた“円高”が追い風となってコンサートホールはもとより教育施設、個人宅、キリスト教以外の諸宗教団体や寺院にまで違和感なく設置される時代が出現したのです。

このような機会に、山手教会のオルガン実現に至るまでの裏話を、後のちのために記しておくことも意味があると考えました。話の発端は1995年の完成

からさらに20年近くの時を遡ります。

私が大学を卒業した1977年の春、社会人生活を始める前の1か月間、主にフランスとスイスを巡る一人旅に出た時のことです。大学の先輩や姉の知人などを各地に訪ねる旅程を組んだなかで、栄光学園時代の同級生の母上が逗子教会で親しかった夫人を通してご子息の須藤宏氏と連絡がつかしました。須藤氏は、我が国で最初のパイプオルガン工房を立ち上げた辻宏氏のもとで働かれた後にドイツへ渡り、スイス国境に近い南ドイツのボーデン湖畔の街リンドウにあるアルビーツ・オルガン製作所でオルガン製作を修行し、日本人として初のオルガン製作マイスター資格を取得されていました。(この会社は、カトリック田園調布教会のオルガンを製作し、須藤氏が組立てを担当されましたが、残念なことに今日では存続していません)

リンドウの駅に着いたあとアルビーツの工房を訪ね、その日は夫人と幼い2人の少年と暮らすご自宅に泊めていただいて、山手教会にオルガンを導入するとしたらどのようなものが考えられるかと、いろいろスケッチを描いていただきながら、楽廊のバルコニーに手摺があればリュックポジティブのような形ができないか、とか側壁にスペースがあれば(古いオルガンに見られる)燕の巣のようなタイプはどうか等々、文字どおりの夢物語を夜が更けるまで語り合ったことでした。

明るる翌日は、アルビーツ社が製作した楽器をリンドウ市内や近郊の教会を訪ね、さらに足を伸ばしてバロックの大修道院として名高いヴァインガルテンのガブラー作(1755年改修)のオルガンをオルガニストに見せていただき、華麗な建築と一体となった威容と壮大な響きに圧倒されました。最後はミュンヘン近郊のオットーボイレン大修道院(カール・リヒターがミュンヘンバッハ合唱団と管弦楽団を率いて演奏会を開いていた聖堂)のリープ作(1767年)のオルガン見学で締めくくる走行距離400キロに及ぶオルガン巡礼をさせていただきました。

さて、日本のオルガン史の草創期にあつて貴重な位置を占める楽器であった明治期の山手教会のオルガンに関しては、新たに見つかった知見を昨年

『やまて』7～9月号で紹介しましたが、1933年（昭和8年）献堂の現聖堂のオルガンにはどのような変遷の歴史があったのでしょうか。

現在の聖堂には、軍部に接収された戦時中や終戦を経て1970年代初め頃までは、2階の楽廊に大型のハルモニウム（おそらくフランス製）が置かれ使われていました。一方、原俊師が主任司祭の時代に、説教壇の下にナショナル製の電子オルガンが置かれて（第2バチカン公会議の典礼改革による日本語聖歌の普及が始まった時期）会衆聖歌の伴奏を行うようになりました。その後、2階のハルモニウムが姿を消した経緯は今となっては不明ですが、聖歌隊の指揮をなさっていた松村菅和師が東京の神学校から中古のリードオルガン（電動の送風機、2段手鍵盤と足鍵盤付き）をもらい受けて移設しました。その折、私が木岡英三郎氏（大正～昭和期における偉人）の関係で、井草にあるカリタス修道女会聖堂の米国メーカー社製パイプオルガンの組立てを手伝った際に知り合った調律師の渡辺伝氏（旧麴町教会のフェルシュレーン社製オルガン1960年や築地本願寺のヴァルカー社製オルガン1970年などの組立てに関わった職人）に依頼して調整したものの、年代物で使い勝手が良くなかったため程なく廃棄となり、代わって加藤忠男師が主任司祭の時代、軽音楽に使われるようなエーストーンを楽廊に設置して、聖歌隊の伴奏に使用されるようになりました。

しかしながら、司教座聖堂として教区の典礼音楽をリードすべき教会の楽器としては、あまりに貧弱な実情を憂いた私は、1984年10月の教会委員会に出させていただいて、典礼憲章にあるように教会が長い間大切にしてきたパイプオルガンの持つ意味や、現有の楽器が典礼にふさわしくないこと、生き生きとした礼拝を行うためには本物のオルガンが必要であることなどを委員の方々に訴えました。（『やまて』1985年1月 第185号）

残念ながら、その時の委員大半の反応としては「なぜ高価な楽器が必要なのか」「設置しても弾く人はいるのか」など、パイプオルガンが他の楽器と何がどう違うのかを知る以前に、導入に対しては否定的な雰囲気が占めていたのです。（以下、次号に続く）



1995年4月9日の祝別・奉献式での須藤宏氏（右）と渡邊

（渡邊敏行）

教会報『やまて』編集部専属カメラマン紹介



氏名：宮 裕一（みや ゆういち）

洗礼名：アンドレア・ボボラ

生年月日：1965年12月19日

受洗年月日：2010年4月3日

（復活徹夜祭）

受洗教会：カトリック小岩教会（東京都江戸川区）

現在の山手教会における役職：教会委員会副委員長、総務兼情報システム委員会委員長

趣味：乗り物が大好きで車の運転やバイク、1級小型船舶の免許も持っています。また、しばらく足が遠ざかっていますが、ルアーフィッシングも趣味です。

山手教会に転籍してから早くも10年が過ぎました。これまで情報システム委員でのホームページに掲載する写真の撮影を行ってきましたが、このたび『やまて』のカメラマンとしても兼務することとなりました。山手教会に移ってからホームページの立ち上げ、山手教会内のインターネット環境の整備、コロナ禍におけるミサの動画配信に関わらせていただきました。特にコロナ禍における動画配信は、大変貴重な経験でした。

今後『やまて』のカメラマンの役割を加え、ミサや教会のイベントなどで、できるだけ皆様の表情を含め、たくさんの写真を撮影してまいります。撮影にあたっては皆様の目障りになるかもしれませんが、ご理解ご協力のほどよろしくお願いいたします。

2025年9月・10月主日ミサの聖歌および奉仕者予定表

	主 日	聖 歌			聖歌隊	時 間	奉 仕 者				備考
		答唱詩編	アレルヤ唱	ミサ曲			オルガン	先 唱	聖書朗読		
9月14日	年間第24主日	典59 ①ab⑤ab	典266 十字架称賛	ミサ曲A 典605~9	*	前日pm5:00	村 松	齋藤(悠)	小佐井	福田(直)	
						7:30	小 嶋	二 宮	大濱(学)	大濱(美)	
						11:30	佐 藤	遠 藤	佐藤(日)	穴澤(千)	
21日	年間第25主日	典51 ①②③	典270 年間25C	ミサ曲A 典605~9	*	前日pm5:00	太 田	工藤(元)	飯塚(秀)	志村(光)	
						7:30	渡 邊	末 澤	官野(さ)	仁井田	
						11:30	手 塚	小 山	中山(峯)	上田(敏)	
28日	年間第26主日	典19 ③④	典273 年間26C	ミサ曲A 典605~9		前日pm5:00	忠 海	宮	工藤(元)	島田(節)	
						7:30	中 川	亀 井	秋山(政)	山本(真)	
						11:30	太 田	子どもとともにささげるミサ			
10月5日	年間第27主日	典35 ①③④	典270 年間27C	ミサ曲A 典605~9	*	前日pm5:00	太 田	竹之内	新井田	阿部(眞)	
						7:30	手 塚	石 賀	古谷(信)	二宮(正)	
						11:30	中 川	山本(紀)	高橋(佳)	寺本(宏)	
12日	年間第28主日	典149 ①②③	典273 年間28C	ミサ曲A 典605~9	*	前日pm5:00	渡 邊	齋藤(悠)	小佐井	福田(直)	
						7:30	手 束	二 宮	大濱(学)	大濱(美)	
						11:30	佐 藤	遠 藤	佐藤(日)	穴澤(千)	
19日	年間第29主日	典71 ②③④	典270 年間29C	ミサ曲A 典605~9	*	前日pm5:00	村 松	工藤(元)	飯塚(秀)	志村(光)	
						7:30	渡 邊	末 澤	官野(さ)	仁井田	
						11:30	米 沢	小 山	佐伯(奈)	上田(敏)	
26日	年間第30主日	典128 ①⑤⑥	典273 年間30C	ミサ曲A 典605~9		前日pm5:00	忠 海	宮	工藤(元)	島田(節)	
						7:30	小 嶋	亀 井	秋山(政)	山本(真)	
						11:30	太 田	子どもとともにささげるミサ			

編 集 後 記

猛暑が続いている9月ですが、空には秋の気配が感じられました。山下公園から見る港の上空には、幾つもの入道雲の他に秋の到来を告げる「うろこ雲」が美しい模様を描き出していたのです。子どものころから空に浮かんでいる雲を、いつまでも眺めているのが好きでした。季節により空に現れる雲は異なり、その雲も風により刻々と形を変えていきます。日本アルプスの雄大な山々の上空に広がる紺碧のキャンバスに描き出されて光り輝く各種の雲は、特に美しいです。しかし、最も感動した雲の光景は、2011年2月11日に南アメリカのパタゴニアと総称されるチリのパイネ国立公園で見たものでした。早朝、緑が混ざった青い氷河湖を前景にそびえるアンデス山脈のフィッツロイ（標高3,405メートル）の上空に雲が広がっており、そこに色温度が低い赤い太陽光線が当たって、鋭く切り立った岩峰と雲が真っ赤に染まり、湖全体に映っている光景でした。その光景を大型三脚と12ミリ超広角レンズから200ミリ望遠レンズを使用して撮影しました。撮影した映像を旅に同行していた現地ガイドで地元のカメラマンでもある男性に見せると「この場所には長年にわたり来ているが、このように赤く染まった光景を見たことがない!」と言って絶句しました。撮影した方角が、朝日が出る東側ではなく北西の方角だったからです。実際に、現地の土産物店で販売している同じ場所の「絵はがき」で、このように赤く染まっているものはありませんでした。大自然は常識では考えられない光景を造り出すことがあります。（土方芳人）

☆表紙のカット（山手教会）は、濱尾文郎枢機卿様の「えはがき」です。